

性を問い直す作業も必要になろう。

宋代以降に完成した「死者供養」システムには、(A)(B)の動態性とともに、(B)を支える①②の二面的動態もまた組み込まれていた。儒が次第に体制内宗教としての地位を確立し、祖先祭祀を独占するなかで、仏教徒たちは、身内の親族に限定されない仏教的な「孝」を模索する。そこでは「無遮」の理念や、「無主」の諸霊への配慮が強調されることになる。改革開放政策のなかで復興がめざましい現代の中国寺院でも、水陸会、盂蘭盆、焰口(施餓鬼)儀礼などに代表されるように、一切の衆生に無遮の供養をする功德をもって、現世の安穩と身近な死者の後生善処(極楽往生)を祈念することが強調される。ここでは①②が有機的に連動した無縁供養が、(A)(B)の共存に結びつけられている。

日本でも元興寺極楽坊聖徳太子立像胎内納入物をはじめ、中世後期の各地の札や塔碑に残された「法界平等」の追善、近世に頻出する「無縁法界」「三界萬霊」などの無縁供養では、①②の動態性が保持されていた。さらに中国から移入され、一五世紀から一六世紀に禅宗を中心に発達をとげた追善儀礼としての「施餓鬼(施食)」においては、『諸回向清規』の回向文などにみられるように、この動態性を保持した無縁供養が仏教の民衆化に大きな役割を果たしたことがわかる。

近世日本の寺檀制度は、体制内宗教となった仏教諸宗派の「死者供養」を、(A)の側面に限定する傾向を強めていく。さらに近代以降の仏教界は、一段と(A)に特化し、寺院による「供養」といえば、もっぱら檀家の「先祖供養」のみが強調さ

れるようになった。それは(B)の中心にあった無縁供養において、「①無遮」を切り捨て「②無主」を強調する動きとも連動していた。現代の盂蘭盆に付随する施餓鬼・施食でも、たてまえとしては「三界萬霊への供養の功德を先祖に回向する」といったかたちで、(A)(B)の共存が認められるが、現実には「各家のご先祖の供養」のみが強調されることによって、一般檀信徒に対して(B)の側面が積極的に説かれることは少ない。

しかし、歴史的展開をみれば、むしろ「①無遮」と「②無主」が有機的に連動することで(B)を支えてきた広義の「無縁供養」こそ、救済システムとしての「死者供養」が広く民衆層に定着するさいの原動力になっていた、という点にあらためて注目したい。

変貌する韓国の死者供養に対する

人々の意識と葛藤

井上 治代

韓国の高度経済成長は一九六〇年から始まった。それに伴って葬礼に関しても変化が起こったが、激変したのは九八年ごろからである。その変化の主導者は一般市民ではなく、行政とその政策を後押しするマスコミ、さらには市民団体といったつも日本のそれとは違い行政の政策意図で活動する人々である。そもそも韓国といえば儒教文化に根ざした土葬が主たる葬法で、後継者を残さずに亡くなる未婚死や、自宅以外の場所で亡くなる客死を忌み嫌う死生観をもっていた。しかし大都市圏の火

葬率は七〇八割となり、自宅死から病院死へ、自宅葬から齋場葬へと軸を移した。本発表ではまず基底文化がどのような政策を通じて変化したのか、ソウル市や仁川市の墓地行政のあり方に触れる(本稿では省略)。そして性急な死者儀礼の変化に對して一般市民がどのように感じているのか、葬墓文化に對する人々の意識を、世代間やきょうだい間の文化や宗教観の違い、そして葛藤等に着目しながら分析する。

筆者は、ソウルおよび京畿道在住で親の葬儀を経験した五〇代の子世代に面接調査を行った(〇八年二月)。韓国で死はまだタブー視される傾向があるため、面接対象者の紹介を依頼した韓国人から「韓国で死に関して聞くことは難しい」といった返事が返ってきた。その中で調査ができた六人(男五名、女一名)は相対的に富裕層や知識階層の人たちである。そのことを踏まえ補足的に葬儀業者から一般的な傾向を聞いている。

韓国で子どもの数が四人から二人へ半減したのは一九七〇年から八三年の間である。筆者が面接した五〇代の対象者は、そのデータの通り、きょうだいが五〇八人と多く、彼らの子どもの数は平均して二人であった。韓国は日本のような家の宗教ではない。家族員がそれぞれの宗教を持っていたり、無宗教の人もある。そこで親の葬儀における宗教はどのように決めたかを質問すると、「故人の遺志」か、それがわからないときは「長男の意見を尊重する」という回答がほとんどであった。ソウル首都圏の葬儀業者に同様な質問をし、いろいろな階層を含めた一般的な傾向を尋ねると、「親が土葬墓など生前に準備している場合は、親の遺志に従うが、何も残していない場合、火葬して

遺骨を納骨堂に安置する新しい形式を選ぶ傾向がある」と語った。また意見の相違があれば、葬儀士が韓国人の宗教的多元性という特徴を生かし、皆が納得する方法を提案して揉め事をおさめているという。

皆の話の中から「長男」は絶対的な決定権を持っていて、そのことがきょうだい間の葛藤を防ぐ要因になっていることがわかった。子どもの数が多いと、先に成長して経済力をつけた長男が、弟や妹を援助するのは中高年世代の韓国人には一般的であり、国民皆年金になるのが遅かった韓国では、両親の扶養も長男が引き受け、死者供養のための経費(高額な接待費など)も長男が支払うため、他の子どもたちは平等を主張してそれらを負担するより、長男に任せられた方がいいという判断をする。「長男は大変だ、だから長男の言うことは絶対だ」と語る。つまり長男に実績があれば、きょうだい間での意見の違いが起これることはないようである。しかし、父を火葬にしたある人は、父の姉だけが土葬を勧めたが、それには従わなかったという。彼は、「近隣住民の中にはきょうだい間の葛藤が起これている」と話す。「火葬か土葬か、親やきょうだいと事前に話題にしておかなかったら、意見のぶつかりあいは多いです」。また自分の場合はどうしたいかと尋ねると「伝統的な葬儀も情緒的で良かった」と評価しつつも、「子どもが二人なので負担をかけられない」「うちの先祖たちの墓は広いから、国土の狭い韓国では、これからは無理でしょう」と、皆が火葬を支持した。このように全員が、政府の政策的方向性は妥当だと考えていることがわかった。